

16. 岡野 武治氏（岡野バルブ製造株式会社 代表取締役社長）



**「産業をアップデートし、経済も文化も強い、
若者が集まるクリエイティブなまちに」**

岡野 武治（おかの たけはる）

北九州市出身。

上智大学経済学部卒業後岡野バルブ製造入社。設計部門、メンテナンス部門（福島第1原発）、製造部門、営業部門、管理部門、企画部門に従事、取締役、常務取締役を経て、20年2月代表取締役社長に就任。

「ものづくりを越えて川上へ」

当社が立地する門司を含む北九州市には元々産業があったわけではなく、歴史的経緯の中で工業化を「経由」したまちだと思っています。地政学的にも官営八幡製鐵所が建てられたことが大きな転換点でした。

ものづくりのまちとしての北九州市はここ100年の話です。抜本的な変化を求めるのは難しい一方で、今後も現在のものづくりのままで生き残っていくのは厳しいと考えています。最先端の新しい技術、サービスを生み出していくのなら良いのですが、単純に「ものをつくる」という発想のまま行くと、川上の産業にはなることはできません。

北九州市は変化への受容性が高いまちだと思いますし、そこは残すべきです。ただし、それがまちの持っているポテンシャルと言えるかは、しっかりと考えなければなりません。

これまで先端のものづくりができるのは欧米と日本などに限られていましたが、今は、途上国の発展もあります。ものづくりに意識を向けてしまうと、彼らとの価格勝負になってしまいうでしょう。

今は、良いものをつくっても売れない時代です。プラスアルファで欲しいもの、価値があるものにするにはマーケティング、宣伝広告、デザインが必要になってきます。よく比較対象と

なる福岡市は商人のまちで、そのあたりが上手だと感じます。北九州市はそれを表層だけで真似するのではなく、アップデートすることが必要となってくるのではないのでしょうか。

「産業のアップデートが必要」

北九州市がこれから0→1で何かを作るのは難しいかもしれません。ものづくりの素地はありますが、最先端かと言えば疑問符がつくところです。しかしながら、マーケティングやデザインのような新しい要素を組み込むことができれば、このまちも変わることができるのではないのでしょうか。

ものづくりの側面で言うと、それに固執しすぎずにアップデートすると良いでしょう。「次の産業をこのまちに導入するには」を議論すべきです。特異性のあるものを目指さないと、他の地域に勝てません。産業だったらこれ、文化だったらこれ、というように、それに値する規模で取り組むべきです。

「若者は『稼げる・楽しい』を求めている」

「経済力」＋「人」。「人」については、若い力がないとまちは廃れる一方です。本社を置く門司も高齢者が多く、若者が出て行っています。良い人材を育成しても、北九州市から出て行ってしまうので、戻ってくるまちにならなければ

なりません。そのためには経済性・将来性のある産業が必要です。産業では北九州市はDXに注力しているので、ITとロボティクスをとがらせることができれば良いと思います。また、やっていて「楽しい」という状況も必要で、昨今は、生きていくために仕事をするというよりも、夢や達成感を持てる仕事をしたいという人が多いと感じています。

「クリエイティブなまちを目指す」

若者には視野を広く持ち、外で手に入れたものを持って帰ってきて欲しいです。またそれ以外の人にもこのまちに来たいと思わせないとはいけません。そのためには経済性だけでなく、文化面のアピールも必要です。「楽しさ」を生むのは文化です。20~40代が楽しめるまちをつくっていくべきです。北九州市は映画に注力していますが、音楽やファッションなど人を引き寄せるような文化力が都市には必要でしょう。

北九州市は新しいことにどんどん挑戦すること、それを許容し、バックアップするまちになると良いと考えます。成長を実感でき、大小含めて、クリエイティブな変化が起こるまちにすることが大事です。様々な海外の事例を見てきましたが、成功しているまちは経済と文化で色を付けている。あるいは文化自体を産業化している。文化で言うと、先述したように若者が魅力を感じる「音楽」「ファッション」や「料理」や「食」に可能性があると感じています。

あれもこれもではうまくいきません。きちんと継続的な活動の中で成果を出していくことが大事で、パフォーマンス的なところに終始すべきではないでしょう。割くことができる資源も限られているなかで、絞ってやるのが大事です。是非、クリエイティブなまちを目指して、

取り組んでいってほしいと思います。

「私欲ではない地域貢献を」

北九州市民は、比較的私欲で動く人が少なく、公のために何かをしようという人が多いと感じており、その精神は大事にしてほしいですね。ただし、ボランティア精神だけで生き残るのは難しいので、基盤となる産業があるうえで、私欲でないところで貢献したいというマインド、質実剛健の気質が大事だと考えます。

多くの北九州市の事業者は、地域にとらわれずビジネスをしているので、極端なことを言うと北九州市でなくても生きていけます。大手の市内を牽引するような企業は、本社を東京に置いている企業も多いのが実情で、地域への関心が希薄になってきているように感じます。一方で、福岡市は内部向けの消費が大きいので、まちの活性化に気を遣っている印象です。

しかし、私は地域貢献も大事だと考えており、社業に直接的な影響はなくても、地域の発展に焦点を当てて取り組んでいきたいと考えています。北九州市に本社を置いているのは、ここで創業し、事業を営んできた恩義を感じているからです。

「具体性ととがりを」

ビジョンというからには、皆が「共感できるか」が大事です。今後は施策として、具体化し、とがらせていく必要があるでしょう。事業会社の役員の任期は基本的に1年なので、1年で結果を出さなければなりません。マイルストーンを置いて、ロードマップを示していく必要があります。それは、抽象的なものでなく、また万人に受けが良いものでもなく、「とがらせること」が大切です。